サン・テヴルモンの歴史観

竹　田　順　子

サン・テヴルモンの歴史関係の作品と言えるのは次のものである。

《Jugement sur Sénèque, Plutarque et Pétrone》

《Sur Alexandre et César》

《Observations sur Salluste et sur Tacite》

《Réflexions sur les divers génies du peuple Romain dans les différents temps de la République》

《Sur les historiens francais》

これらに扱われている題材は主としてローマ史から得られたもので，中でも《Réflexions》が最も重要な中心的な作品で，我々の考察の主たる対象でもある。ここに描かれているのは人間の歴史，より正確に言えば人間精神の歴史であり，超自然や神の登場する場は与えられていない。それが現代の我々にはもはや当然の事であるにしても，サン・テヴルモンが《Réflexions》を執筆したのは1667年から1669年にかけてで，因みにモンテスキューの《Considérations sur les causes de la grandeur des Romains et de leur décadence》の世に出たのが1734年，ヴォルテールの《Essai sur les moeurs》は1754年である事を思い起こせば，サン・テヴルモンが歴史感覚において時代を先取りしていたと言えなくはない。

さて，《Réflexions sur les divers génies...》という題名に示されている様に，サン・テヴルモンが歴史理解の指標と定めたのが le génie「特性」なるものである。即ち彼の歴史観の根幹をなすのは，歴史の一般原因を「特性」とよぶものに認めた事である。そこでこの小論において我々は，何故 génie が重要な概念になるのか，génie とは一般的にはどの様なものであるのか，génie を通して歴史をどの様に理解しているのか，などサン・テヴルモンの歴史認識の有りようを明きらかにしたいと思う。

先ず我々の目を惹くのは，彼の歴史に向かう態度が実に主体性に富む事である。《Réflexions》の冒頭で彼は自らの著述の方針を明確に示す。即ち，これから書こうとする歴史から作り話や神話を排除するつもりである事，なぜならそういうものは歴史的真実ではなくて，人間の弱さや欠点を熟知する支配者達が拵えたものだから，というのがその理由である。

「民族の起源は個人の系図と同じで，人は卑賤な始まりには耐えられない。妄想に向かう者もあれば，作り話に夢中になる者もいる。人間とは生まれつき欠陥のある，生まれつき虚栄心の強い者であるが，その中でも，国家の建設者や征服者の様に，人間の条件に満足せずその弱点や欠点を知っている人達は，人間の条件の外に彼らの功績の原因を探し求める事がよくあった。その為古代人達は一般に何かの神に執着したがり，自分達はその子孫であると言ったり私的な庇護を感謝したりしていたのである[(1)]。」

ここには古代の歴史や資料に対する批判精神がみられる。古代の歴史から恣意的に創作された部分を取り除くことでローマ人自身の側に存する虚妄性を明白にするばかりではなく，歴史家達によって古代の栄光が感情的に真実以上に誇張される危険，例えば自分達の時代の悪徳が耐え難いからといって先祖達の清廉を讃える余り何にでも感嘆の念を拡げたり，現代を嘆く余りに何の苦痛も蒙らない古代を誉立てる事などをも批判している。どの時代にもそれぞれ欠点と長所はあるのだから分別を失なわずに正しく判断をすること，が良しとされる。この様にサン・テヴルモンが客観的な態度を明確にし得たのは，彼自身の歴史への視点が確実に定まっていたからに他ならない。改めて繰返すべくもないがその目標とはローマ国民の génie である。

「私は作り話に基いたのや，判断の間違いの為に誤まって作られた賛美を好まない。ローマ人達には賛美すべき真実の事柄は多くあるのだから，作り話によって恩恵を与えようとするのは却って彼らに傷をつける事になる。根拠のない尊敬など全くせぬ事が彼らの為になる。こういう積りであるから，私は世間一般に認められ受け入れられている下らない意見には従わず，彼ら自身によって彼らを考察したいと望んだのだ。(……) 私は記憶すべき幾つかの時代の特性や，その為にローマが様々に活気づくのが見られた色々な精神を辿る事で満足するだろう[(2)]。」

それでは一体なぜ génie を辿る事が歴史理解の主たる課題となるのであろうか。それはサン・テヴルモンが人間を見る時，「ほとんど常に，ほとんど全ての人を情念が動かす[(3)]」，という考えによって，人間性の本質を見据えているからである。一例を挙げよう。人間社会生成の起源について，彼の考えによれば，人間は初め孤独の中で震えながら暮らしていたが，より快適で安心な生活を送ろうと個人的な利己心から社会を確立したのだという。従って社会体制の本来の姿は危険はより少なくより安楽に我々を暮らさせる様に制度化されているはずであり，更にその上にそれぞれの人が他人の為に我が身を尽くすという特性を発揮すれば，そこで全く理想的な社会を維持する事も可能になる訳だが，とは言え他人への献身という特性は，そうする事によって個人的なある種の利益と呼べるもの，即ち名誉や権利が得られるからこそ生ずるのだ，と迄言うのである。

この様に人間性に理想や期待の念を押しつける事なく，人間の本質を直視するという立場からすれば，《Réflexions》の前に書かれた《Observations sur Salluste et sur Tacite》と

いう作品において両史家の比較を行いながらも，サン・テヴルモンの立場がサルスティウスのものに一致しているのは当然である。というのも両史家の最大の相違点は，タキトゥスが全てを政治的に解釈するのに対して，サルスティウスは本性 (le naturel) に重きを置く点にある。サン・テヴルモンによればタキトゥスの描く世界は余りにも完璧でこの上もなく美しいが，屢々描かれる必要のないもの迄描かれたり，時には深入りしすぎた考察によって問題の上を通り越してしまっている。一方サルスティウスは人間を気質 (le tempérament) によって動かし人間の génie を良く知る事に最大の配慮をし，又「野心，吝嗇，奢侈，腐敗，共和国の混乱のあらゆる一般原因がサルスティウスによって非常に頻繁に挙げられている。(……) 彼は空論によって何かを探ろうとはせず，人間の情念や特性によってほとんど全てを探ろうとする[(4)]」。この文中に一般原因という語が出てくるが，この箇所以外には見当たらない語ではあるものの後にモンテスキューにおいてより重要な概念となることばでもあって我々の注意を惹く。歴史を根本的につき動かすのが人間の本性であるという考えは，génie それ自体が歴史現象に対する一般原因であるという事に他ならないからである。

そこで《génie を良く知る》為にはそれが良く現われる情況を考察の対象にしなければならない訳だが，サン・テヴルモンによれば戦争こそがその為の具体的で最も顕著な情況とされる。戦争について詳述する事は自分の目的ではないと断わりつつ，そこにおいてこそ人間の精神の傾向とか，良きにつけ悪しきにつけ尚一層はっきりした性格とかが現われるという。一つの例として戦争の勝敗の原因について考える場合をみてみよう。第一次ポエニ戦争でローマが勝ったのは何故か。原因とみられるのは次の三点である。その一。当時のローマ人の主たる性質は《勇気》と《気概》であったので，非常に困難な事も企て，どんな危険にも驚かず，どんな失敗にも怯まず，成功には更に大いなる成功へ勢いづけられ，困難には尚奮い立つという風であった。一方カルタゴ人は，当時非常に貧しかったローマ人に比べ，非常に富裕で，海上の経験もあれば諸国民との交易も行なうなどローマ人には無い有利さがあったのだが，その故でもあろうか，行動の仕方はローマ人と正反対で，幸運の時には無頓着で，不運の時にはいとも簡単に落胆してしまう始末であったという。その二。両国家とも共和制であったが，ローマは軍隊に基礎を置いていたのに対しカルタゴは商業に置き，戦に対する気構えが違っていたという事。その三。カルタゴでは個人の美徳によってのみ偉大な事が成されたが，ローマでは将軍達の犯した失策を国民の気概によって挽回し勝利を得たという事。以上いずれの原因をみても両国民の精神的な差異について検討が成されていて，この様な考え方をすれば，上述のどの特性も勝者に適うものである故にローマが勝った事を驚くには当たらない訳である。従ってこの時ローマは《勝つべくして勝った》という意味が読みとれるのである。

戦争に関係するもう一つの例を挙げよう。少し時代を遡りローマとカルタゴとが地中海

世界を揺るがす大戦争に突入した原因は何かという問題である。そもそもの切っ掛けはシシリー島のメッサナからローマに対して援軍派遣を要請され，遂にカルタゴとの戦端が開かれたのだが，それは飽く迄切っ掛けにすぎずこの大戦争も《起こるべくして》起こったのだ，それはローマ人の感情の推移を辿る事で説明づけられる，という風に考えられている。というのもローマがイタリア半島の覇権を握る前に戦かわねばならなかったピュロスとの戦争の経験によってローマ人に今までになかった新しい感情が吹き込まれたからである。即ち異国の敵との戦によって戦争方法の新知識も得られたし，イタリア半島の外にはずっと多くの黄金や銀や芸術品のような素晴らしいものがある事も分かり，その結果地中海を渡りイタリア半島の外へ出たいという欲望を生じた。その欲望こそが第一次ポエニ戦争の原因となったというのである。

これらの他にも戦争の原因や勝敗について同様の見方に基づく検討が成されている例は幾つもあるが，以上の二例からだけでも我々はサン・テヴルモンの精神主義的理解の方法から引き出されてくる二つの根本的な命題を読みとる事ができる。一つに特性はそれ自身変化するものと理解されている事。二つ目に特性による歴史の因果関係の究明の仕方は，サン・テヴルモンをして決定論の立場に立たしめているという事である。以下それらについて更に詳しく述べてみたい。

先ずサン・テヴルモンの把握しているgénieとは，一般論として言えば，決して絶対的な内容や性格で規定される物ではなく，相反する要素さえ同時に含む相対的な傾向の事である。《Sur les historiens francais》には次の様な言葉が見られる。「同じ様に思われる特質（les qualités）にも微妙な差があるもので，我々がそれを見つけ出すのはなかなか難しい。唯一の特質の中にも時には悪徳と美徳が混ざりあっていて，それらを分かつ事は実際決して出来ない[(5)]。」

更にgénieはその内容を時の流れに従い変質させるものである。数多くの内から一例を拾えば，初期のローマ人には名誉を重んじるという特性があったが，スキピオの時代になると名誉は妄想で光栄は完全な虚栄だと考えられ始め，名誉の特性に利己心の特性がとって代った。その結果新しい特性は，人々の精神的差異に応じて働きかけ，胸に大事を抱く人々は権力を獲得したがるし，低劣な魂の人々は財を蓄える事に手段を尽くして足れりとするような異なった影響を与えたという事である。

génieが時代と共に変化するというこの考え方は重要である。ヴォルテールが人間の本性は不変であると措定した為に彼の歴史認識に一つの重大な欠点のある事を露わしてしまったのとは対照的に，変化するgénieという捉え方こそサン・テヴルモンの歴史意識を支えていると言って過言でない。Barnwellが歴史に絶対的なるものは何も無いという考え方——というのも時代から時代へと変化してゆく故に相対的な価値しか持たぬ精神に歴史が依拠しているからであるのだが——それをさして，サン・テヴルモンの歴史に対する相

対的な見方を示すものだと述べているが，当然である。そして我々は，この変化の認識こそが，サン・テヴルモンには歴史的発展の認識がある事を示すものと考えるのである。

その点は後述する事にして，ではgénieに変化を起こす原因は何であるのか，と言えば，それは環境的条件である。時代状況と呼んでもいいだろう。参戦や戦勝，敗戦などによる変化，あるいは長く続く平和さえ人々の心を倦ますという様な働きを及ぼすし，社会の形態や社会体制という環境的要因も数えられる。社会と特性との関わり方は，社会が特性を規定し，作り上げ，変化させるという方向に働きかけるばかりでなく，変化した特性が又新たな社会的状況を生みだすという相互的な関係にあるので，その組合せにより複雑で多様な歴史現象が繰り広げられる訳である。

ところで特性が変化すると言っても，その変化は一斉に完全に全体的に起こるものではない。名誉の特性に利己心の特性がとって代わった時期がその例である。「人は突然に完全な腐敗に向かうのではないから，名誉から利己心への移行状態が共和国内にあって，その時そこには違う観点を持ってではあるが，両方が共に存続していた。ある事柄には誠実さがあり，別の事柄には破廉恥があった[(6)]。」

又，特性が社会状況に働きかける場合を考えると，ある一つの特性がある一つの状況に対して唯一つの絶対的な意味を付与する訳ではない。その例。ハンニバルを打負かし，カルタゴを滅ぼし，アンティオコスを衰微させ，マケドニアを征服し，全ギリシア人を服従させる原因となった特性，即ち祖国を愛し祖国の栄光を望む気持をさして，「この特性は共和国の偉大さの為には好都合だが，その自由の為には有害であった[(7)]」，と記している。

更に，一つの特性が存続し歴史に対して大きな役割を果たす為にはそれに相応しい状況が必要であるとも言う。ファブリシウスの時代には無私無欲を美徳とし貧乏を名誉と考える精神が支配的であったが，大国では貧乏な様子というのは軽蔑されるもので，当時のローマは小国であったればこそこの様な精神がこの時期に存続していたのだと言う。同様の例として初期のローマ人達を特徴づける野蛮さについて，それ自体は誉むべきものとは言えないが，初期ローマの状況には実に相応しい特性であった事を認め，「かくも粗野でがさつな習俗も形成されつつあった共和国には適していた事を認めなければいけない。この困難に決して屈服しない厳しい性質は，柔和な気質がもっと多くの光と理性を持って成したであろうよりはずっと堅固にローマを確立したのである[(8)]」，と述べる程である。

以上génieの変化に関する幾つかの考察によって導かれる理解の要点をここでまとめておこう。即ち歴史の各局面を変化する特性によって捉えた事は相対体な見方を示すものであるという事。特性が社会を規定し社会も特性を規定するという風に個人の力の及び得ない所で歴史は動かされているとする決定論的な歴史観を窺わしめるという事。更にそこへ歴史的発展の認識のある事を付け加えなければいけない。

変化すべきものであるgénieのその変化の過程を見ると，無知から知へ，野蛮から洗練へという方向に進んでいる。凡そ無知よりも知が，野蛮よりも洗練がより多く人の心を魅

するからであろう。「この様な知識（ここでは戦争に関するもの）は技芸や儀礼と同様，一つの民族から別の民族に伝わり，様々の時代と様々の国に広まる[9]」，と述べ，知識や技術や芸術や洗練された趣味などは自然に人々に欲せられ，時代と場所を越えて自ずと伝播してゆくと考えられている。そこには進歩の観念さえ垣間見られると言えよう。しかしサン・テヴルモンの歴史観にペシミストな趣きが感じられるのは，何事によらず物事は常に堕落し腐敗に至ると考えられている為である。カルタゴとの和平後のローマの状況を例にとると，苛烈な戦争の終わった後なので人々には休息の気持が起こり，それは快楽への嗜好を生じさせた。その為人々は芝居や見世物に関心を持ち始めるが，その一方で個人の正義が廃れ，訴訟がふえ，禁欲の節度が失なわれて不節制となり，次第に腐敗の方向へと進んで行ったと言われている。精神的余裕が一方で文化的発展を生み粗野から洗練へと向かわせるが，同時に又精神的腐敗も招くという風に，発展と腐敗が盾の両面である事を読者に意識させずにおかないのである。

ただ，発展的歴史観が窺われると言っても，それは歴史の各局面で重要な役割を果たしているgénieの様々の相を我々が跡付ける事により知られる訳である。サン・テヴルモンには各時期の状況やその意味を正しく理解しようとし，又ダイナミックな変動に関してはその因果関係を明きらかにしようとする努力は成されているものの，ローマ史の流れの全体を一貫した道筋によって順序だてて語るという意識には少し欠けているようである。確かに歴史的時間というものは，静かに等質に流れゆく物理的時間とは異なる。支配者の交替や戦争や又芸術の表現形式をもって時代を区分して考える事が歴史を見る事であるだろう。それにしてもサン・テヴルモンには連続性の意識は少し稀薄である。第Ⅰ章から第Ⅷ章に見られるクロノロジックな不明もその例であるし，第Ⅸ章から第XV章は本文がなく概要しか残されていないというのも問題である。

Ternoisは《Réflexions》の創作過程がそもそも連続的な意識を欠いたものであった事を記している。即ち，「彼はローマ史を連続性の中で検討しようとは思わなかった。時折楽しみの為に古代史家の数節を読み，そして何か言うべき事があれば一頁か数行の意見を書き付けた。こういうフラグマンが集められて一つの作品となったのだが，おそらく彼には職業的学者の様に連続して専ら仕事の為に読書をするという事は余りなかったのだ[10]。」これが事実とすれば，ローマ史の中で実際に書かれなかった部分があっても不思議ではないし，Ternoisの様に第Ⅸ章から第XV章がもとより概要しか存在しない《野心的な草案》と考える事も可能である。とは言え概要を見れば，それらの章でもやはり英雄や国家の指導者達の特性を描こうと意図されていた事が分かるので，それら数章の内容によっては彼の歴史認識に重大な変化があったかもしれないと思わせる程の叙述がなされたはずだと想像する事はできない。そして先に我々が示した歴史認識の幾つかの特徴が否定されるという訳では決してないのである。

ところが最後の二章，第XVI章と第XVII章は第Ⅷ章までの記述と少し性格を異にするも

のである事に気づく。ここではローマ国民の影が薄れ，アウグストゥスとティベリウス両皇帝の記述が中心となり，恣意的なまでに対照的な両者の治世の相違が述べられている。即ちアウグストゥスによって政治的理想状態が具現された事と，ティベリウスによってそれらがことごとく潰えたという事である。それ迄の章ではローマ国民の特性についてあの様に様々の検討を行なったのに最後に至って国民より個人の問題を強調しているかの様に見えるのは何故なのだろう。アウグストゥスについては言葉を尽くして誉め上げる一方，ティベリウスはことごとに貶されていて，Niderst の注釈によるとティベリウスの性格について他のどんな史家も記していない事に言及しているのは想像力のゆきすぎかあるいはルイ XIV 世の事を考えていたのかと言われる位で，君主論の形を借りた時代批判でもあると理解する事もできよう。

だがしかしこれら二章でもやはり最大の関心は人間の本性なのである。両皇帝の本質的な差異は次の様に考えられている。即ち，「澄んだ繊細な理性の光を持っていたアウグストゥスは彼の時代の特性を見事に知っていた。(……) 間違った判断による術策とずるさにたけていたティベリウスは精神の傾向を軽んじていた[11]。」一方は国民精神の傾向に従って抵抗のない穏やかな政治を執り行なったけれど，他方は従順と奉仕を欲していた国民精神の大勢を誤解して，猜疑心をもって徒に強圧的な政治を行なった。「もしアウグストゥスの方針が守られていたら皇帝の下で暮らすのも執政官の下で暮らすのに劣らず心地良かったであろう[12]」に，実際はティベリウスの悪しき性質が何代もの皇帝達によってみならわれ帝国にとって不幸な状態が続くことになるのである。これ迄はスキピオやハンニバルの列などから，個人が自己の能力を生かせるかどうかは状況次第であるという解釈が述べられてきたが，最後の二章に至り，国家の指導者にとっては国民の génie を良く知る事が重要であるという判断が示された訳で，歴史に果たす個人の役割という一種の偶然を全く否定するものではないという事をここに付け加えなければならないだろう。とは言え個人が良きにつけ悪しきにつけその力を揮う為にはそれなりに条件を備えた環境が必要なのだからやはり決定論としての性格が強いという点に変わりはない。

これらの二つの章から，我々は今一つの意味を読みとることもできるだろう。それはつまりこの作品の題材であるローマ共和制の終焉を語る事である。アウグストゥスをもって帝制の始まりとするのは周知の事柄であるが，彼が実質上はあらゆる権限をその手に収めていたにも拘らず，形式上は共和制の体制を維持しようとしていた事もよく知られている。ローマ国民が自由を求める気持から作り上げた共和政体が発展を重ねて遂にアウグストゥス治下にその頂点に達し安寧を得たと見，と同時にそれは共和政体そのものの終焉でありティベリウス帝以後の腐敗の道を駆け下りる切っ掛けになったという意味も読みとれるのである。

結びにあたって，共和制時代のローマ国民の génie の変遷についてサン・テヴルモン自

身の言葉で要約すれば次の様になる。「実に初期の時代にあるのは大いなる勇気，品性の大いなる厳格さ，祖国への大いなる愛である。後期においてそれらに等しい価値は戦争やあらゆる事に関する大いなる知識と，一方大いなる腐敗である[13]。」粗野，素朴から次第に知識と洗練を獲得してゆき更に腐敗へも向かう人間精神の歴史は，同じく発展的史観を信奉する十八世紀の歴史観と軌を一にすると言えども，光と理性により未来は永遠に啓かれると信じられた楽観的調子はここにはない。しかしサン・テヴルモンの着目したgénieの歴史というのはヴォルテールの言うles moeursとl'esprit humainの歴史とほぼ同じ意味だと言えるし，又歴史をつき動かす原因をgénieにあるとした決定論的史観は，もっと明確な意識をもって原因というものを探ろうとしたモンテスキューによって更に発展する事になるであろう。「人間を不幸にするものはそれを避ける為に，又幸福にするものはそれを得る為に[14]」，書かれたはずのサン・テヴルモンの歴史は十八世紀の歴史につながるものを我々に感じさせているのである。

注

(1) *Réflexions*., p.220.
(2) Ibid., p.222.
(3) *Sur les historiens français*, p.88.
(4) *Observations sur Salluste et sur Tacite*, p.65.
(5) *Sur les historiens français*, p.83.
(6) *Réflexions*., p.319.
(7) Ibid., p.318.
(8) Ibid., p.234.
(9) Ibid., p.247.
(10) Ibid., p.215.
(11) Ibid., p.363.
(12) Ibid., p.361.
(13) Ibid., p.237.
(14) *Sur les historiens français*, p.74.

BIBLIOGRAPHIE

SAINT-EVREMOND, *Oeuvres en prose*, éd. R. Ternois, Paris, Didier, 1962-

1966, 4 vol.

SAINT-EVREMOND, *Textes choisis*, éd. A. Niderst, Paris, Editions sociales, 1970.

H. T. BARNWELL, *Les idées morales et critiques de Saint-Evremond*, Paris, P.U.F., 1957.